

資料（史料）紹介

## 大学スポーツ界におけるスカウト活動に関する研究

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 上 | 代 | 圭 | 子 |
| 持 | 田 | 紀 | 与 |
| 三 | 科 | 真 | 澄 |
| 城 | 戸 | 絵 | 理 |
| 高 | 木 | 彩 | 圭 |
| 古 | 葉 | 隆 | 明 |

東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第1号 抜刷  
2016年（平成28年）3月20日



資料（史料）紹介

## 大学スポーツ界におけるスカウト活動に関する研究

上 代 圭 子  
持 田 紀 与 美  
三 科 真 澄  
城 戸 絵 理 沙  
高 木 彩 圭  
古 葉 隆 明

### **Study of Scouting in College Sports**

JODAI, Keiko  
MOCHIDA, Kiyomi  
MISHINA, Masumi  
KIDO, Erisa  
TAKAGI, Ayaka  
KOBAYASHI, Takaaki

#### Abstract

By 2018, Universities in Japan will have to deal with a significant drop-off in student population, a problem that is presently a major concern for Japan. Many universities have focused on strengthening their athletic programs as a way to promote publicity and bolster its school identity, and are actively engaged in recruiting activities for athletically talented high school students. However, such recruits must also satisfy academic standards. In the first place, the process for screening talent for university admission is different from discovering talent (Williams & Reilly, 2000).<sup>17)</sup> For this reason, it is difficult to identify student athletes who will excel in a university-level sport when applying a scale used by the Japan Sports Association and other sports organizations to identify potential star athletes. The purpose of this case study is to identify requisite elements for identifying high school athletic recruits with the potential to succeed in university sports.

Research was conducted using semi-structured interviews, for 9 coaches.

As a result, a few elements were identified when those coaches recruited potential high school athletes.

キーワード：大学生アスリート，スカウト活動，スポーツタレント選抜  
College student athletes, Scouting, Sports Talent Identification

## 目 次

1. 緒論
2. 研究方法
  - 2.1 調査方法
    - 2.1.1 調査対象
    - 2.1.2 調査手順
  - 2.2 分析の枠組み
    - 2.2.1 分析方法
3. 結果と考察
  - 3.1 インタビュー調査からの結果
    - 3.1.1 スカウト活動の方法
    - 3.1.2 選手の情報を得る手段
    - 3.1.3 スカウト活動時に選手を見る際の着目点
    - 3.1.4 スカウト活動時に話をする相手
    - 3.1.5 スカウト活動時に収集する情報
    - 3.1.6 大学生選手のスカウトをする際の着目点
    - 3.1.7 スカウト活動時のキーパーソン
    - 3.1.8 志望校を決定する際のキーポイント
    - 3.1.9 大学生としてプレーする選手のスカウト活動時の苦労点
    - 3.1.10 大学生を指導する際の苦労点
    - 3.1.11 大学でプレーすることが向いている選手の特徴
  - 3.2 結果のまとめ
4. まとめにかえて
5. 研究の限界

## 1. 緒 論

2020年に東京においてオリンピックとパラリンピックが開催されることが決定し、自国開催であるこのオリンピック・パラリンピックにおいては、日本代表選手が活躍されることが非常に期待されている。これに伴って、「ユニークで圧倒的なパフォーマンス，ポテンシャル，適性を兼ね備えた『ワールドクラス』のタレント・アスリートを発掘・育成」を目的として、日本体育協会では文部科学省からの委託事業として「2020ターゲットエイジ育成・強化プロジェクト（タレント発掘・育成コンソーシアム）」が生まれ、有能なアスリートの発掘や育成・強化の手法・仕組みに対する調査研究・開発なども行われている。

競技力は、心理的側面と肉体的側面から検討されるが、心理的側面としては、「意欲」，「闘争心」，「冷静さ」等の要素がよく検討されている（藤澤・田淵，2005）<sup>2)</sup>。また，競技レベルや競技

経験年数、競技種目、性差などが影響を及ぼすとされる心理的競技能力があるとされ、経験があり競技レベルが高い選手ほど、心理的競技能力があるとされている（徳永ら、2000）<sup>13)</sup>。そしてその心理的競技能力は競技パフォーマンスに影響を及ぼすとされている（竹野ら、2014）<sup>12)</sup>。

肉体的側面については、日本で行われているタレント発掘の多くは「走る、跳ぶ、投げる」といった基本的な運動能力を測定し、選抜された子供たちに対して科学的なトレーニングや能力開発・育成プログラムを付与し、その子供たちに適した競技種目を紹介する（八重樫・勝田、2010）<sup>15)</sup>。ため、新体力テストの種目などから一般的な運動能力の高さを評価しつつ、加えてそれ以外の能力を客観的に示す測定・評価の方法を模索している（松井、2012）<sup>5)</sup>。

だが、本来有能なアスリートに必要な競技能力とは、高い技術や体力、筋力だけでなく、問題解決能力やコミュニケーション力、知的能力も重要であり（勝田、2002）<sup>3)</sup>。また、競技環境に影響されるのはもちろんのこと、最近では遺伝的な素因に恵まれていることが競技における成功の鍵を大きく握っているとされる（内藤；2008）<sup>8)</sup>。ように、遺伝子研究にも注目が集まっている（清水ら、2008<sup>11)</sup>；柳原、2008<sup>16)</sup>；内藤、2008<sup>8)</sup>）。

このような状況において、大学でもスポーツ選手の育成・強化が積極的に行われている。2015年1月に開催された箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競走）では、青山学院大学が優勝したが、これは大学の強化策の結果である。近年、箱根駅伝の本戦に出場することは非常に厳しくなっており、古豪と呼ばれる大学でも優勝どころか本戦に出場すらできない状況にある。これは各大学が箱根駅伝に出場することにおけるカレッジアイデンティティの醸成や宣伝効果などの様々メリットを認めた結果、強化に力を入れているためである。このような強化は箱根駅伝のみに見られる傾向ではなく、サッカーや野球なども同様であり、大学をあげての強化がなければ勝つことができない時代となっている。

そしてそのために、指導者による優秀な高校生の勧誘活動も積極的に行われているが、これはタレント発掘ではない。タレント発掘が、そのスポーツに参加していない潜在的競技者を発見または識別することであるのに対して、タレント選抜は、既にスポーツに関心をもって参加しているタレントを選別することである（Williams & Reilly, 2000）<sup>17)</sup>とされるため、大学の指導者が行っているのは、タレント選抜であると言える。そして、大学生アスリートはプロスポーツ選手ではないため、きちんと授業に出て試験に合格し単位を取得するといった、スポーツ選手としての資質以外のものも求められる。したがって、指導者も「勉強についていけない」など、大学生として耐えられないと思えば、どんなに優秀な選手であってもスカウトすることができない。また、親元を離れて生活する選手も少なくないため、生活を自己管理できる人間でなければ墮落してしまう。

このように、大学スポーツにおいて活躍する選手を見極めることは、一般的なタレント発掘ならびにタレント選抜の際の要素を測る尺度では困難である。だが、これまでどのような要素が大学スポーツにおける優秀なアスリートとなり得るものであるかは明らかにされていない。

そこで本研究では、有望な大学生アスリートを判断するための一助とすべく、近年スポーツに力を入れている大学を事例として、高校生アスリートを大学スポーツ界にスカウトする際のポイントを明らかにすることを目的として研究を行った。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査方法

#### 2.1.1 調査対象

被験者の年齢は33歳から60歳であり、スポーツの指導者としてのキャリアは、5年から21年であった。被験者は全員大学の指導者である。

彼らは、現役時代はプロスポーツ選手や日本代表として活躍していた後、指導者になってからは大学日本一になるなど、優秀な成績を取っている。なお、詳細については本調査は匿名を条件に協力してもらっているため、本人の特定をさけるため指導者AからIとし、詳細は割愛する。

#### 2.1.2 調査手順

まず、調査対象者へ直接メールまたは電話にて連絡し、本調査への協力を依頼した。そして後日、半構造化面接法による面接調査を実施した。なお、調査期間は、2015年8月から9月である。

面接調査は個別に実施し、所要時間は被面接者1名あたり60分程度であった。面接の進め方は、順をおって項目を1項目ずつ質問するのではなく、スカウト活動について被験者自身に自由に語ってもらっていき形で進め、その中で用意した質問項目など本調査の検証に必要な点を、面接者が補足する形で質問する遡及法を用いて行った。なお、直接面接を実施の際には、被面接者からの了解を得て面接内容を録音した。

なお質問項目は、地域タレント発掘・育成事業に関する協力ガイドライン（日本オリンピック委員会、2008）を参考とし、パイロットテストの結果を基にプロジェクトメンバーにて決定した。なお、項目は、①スカウト活動の方法、②着眼点、③交渉相手、④社会人と大学生アスリートをスカウトする際の相違点、⑤入学後苦労した点などである。

### 2.2 分析の枠組み

#### 2.2.1 分析方法

分析方法は、Mayring（1983; 7th edition, 2000）<sup>7)</sup>が構造化した質的内容分析を援用したが、分析を行う際には、SPSS Modeler Text Analytics for Surveys 4.0.1 for Windowsを使用した。テープに録音した内容を文字に起こし、原文のままSPSS Modeler Text Analytics for Surveys 4.0.1 for Windowsにて、形態素解析を行った後、頻出語や類義語を整理するといった形でデータマイニングを行い、出現数の多い語句について検討を行った。

なお、本研究においてSPSS Modeler Text Analytics for Surveys 4.0.1 for Windowsを用いた理由は、「日本語は係り受けや文中で主語省略が頻繁に行われるといった問題があり、これらの処理が英語圏などに比べ日本語のテキストマイニングを困難にしていた要因でもあるが、その点において『IBM SPSS Text Analysis 4』は利便性が高い。」（抜井、2012）<sup>10)</sup>とされるためである。

なお、結果をまとめたグラフに関しては、まず、それぞれの項目においてキーワードの登場回数を示した。そして、各項目について分析する際には、「選手」が中心となっていることが推測されたことから、「選手」と他の抽出されたワードの関係について分析を行い、グラフに示した。したがって、関係を表すグラフに関しては、「選手」を100%とした際の相対値として、どの程度関係があるのかについてSPSS Modeler Text Analytics for Surveysで分析した結果を、比率（%）で表したものである。また、抽出されたワードについては、面接調査内で用いられた言い方のまま

である。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 インタビュー調査からの結果

##### 3.1.1 スカウト活動の方法

スカウト活動の方法について最も多く抽出されたワードは、「試合」と「選手」であり、続いて「先生」、「練習」であった（図1）。そして、「選手」と最も関連するワードは「試合」であったが、これは「試合に選手を見に行く」という方法が必ず行われていたためであり、また試合だけでなく練習も視察に訪れていた結果である（図2）。

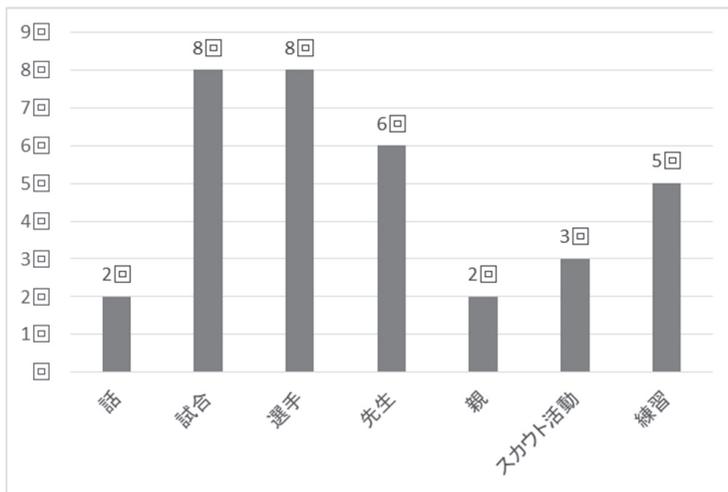


図1 スカウト活動の方法におけるキーワード

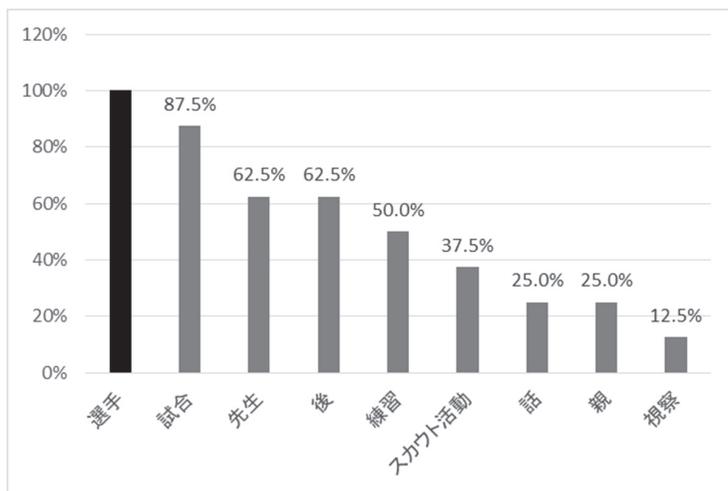


図2 スカウト活動の方法における「選手」と他のキーワードの関係

例えば、指導者Bは、「主要な大会、インターハイとかには必ず行く。地方でやっているブロック大会も行く。必要であれば、更にブロックから下りて県大会も行く。ただし、県大会へ行くのは、本当に（欲しい）ターゲットの選手がいるとき。あとは、高校の練習を見せてもらったり（する。）とし、また他競技の指導者Eは、「高体連の試合、県大会、地区大会、インターハイ（には行く）。あとは、高校訪問、高校の先生に『いい選手を送ってください』と頼むだけではなく、実際練習に行って、（一緒に）練習して教える。」と答えている。なお、団体競技の指導者Bは、「ゲームでは、みんな一生懸命やるので、高校に行って練習を見るのが1番良い。」とも述べている。

なお、「選手」との関連ワードとして「先生」が抽出されている理由は、スカウト活動の際の窓口を高校の教員にしている場合が多いからである。指導者Gは、「高校の先生に電話連絡し、状況を聞かせてもらう。大学に進学し、競技を続けたいと考えている選手がいるか。いた場合は、すでに方向性を決めているか、本学への希望者がいるかの確認をする。」とし、実際に試合や練習を見に行く前に連絡をすることがあったり、指導者Eは「高校の先生と一緒に選手を作って、その選手をうちに送ってもらう。」としていることから、高校の教員と一緒に指導をすることでスカウト活動をしやすくすることもあるようである。

### 3.1.2 選手の情報を得る手段

選手の情報を得る手段として最も抽出されたのは「選手」と「先生」であり（図3）、「選手」と関連のあるワードを見ても、最も関連しているのは「先生」であった（図4）。これは選手の情報は高校の教員から取っていたためである。例として、指導者Eは「今は各地にパイプの強い先生達がいるので、その先生達とミーティングする。先生達も利害関係なく動いてくれる。みんなで良くしようという形になっているので、高校の先生達とのパイプで自分は助かっている。」と述べている。逆に、「先生の了解を得て本人に会う。中には決まっているからといって会えない子もいる。（そうでなければ、）まずは本人と話をし、先生に言って状況を仕入れる。」とし、選手本人とは会えないこともあることから、まずは教員と話をし、選手の進路状況を把握しているようである。このように他大学への進学も関係してくることから、「本大学」、「他大学」も抽出されたと考えられる。なお、「全国のいろいろな先生と繋がっているの、いい選手がいるとか、中学生で

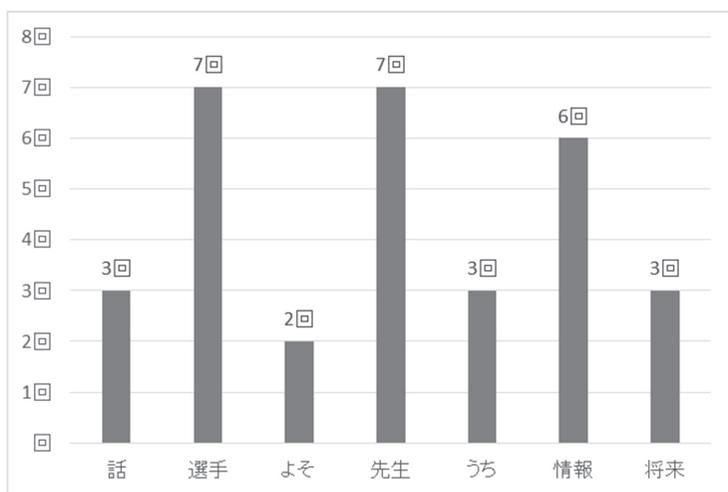


図3 選手の情報を得る手段に関するキーワード

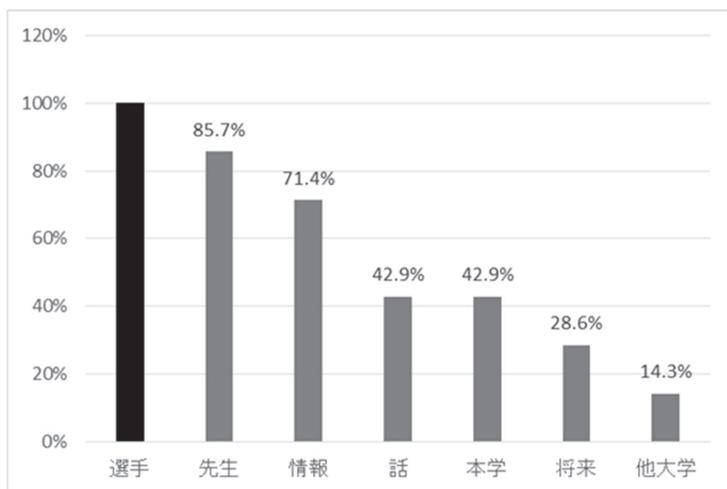


図4 選手の情報を得る手段における「選手」と他のキーワードの関係

こういう子がいるとか、それは将来の3年後、4年後（にどうなるか）という部分でチェックする。」（指導者B）と述べており、長期的視野でいることが伺える。

### 3.1.3 スカウト活動時に選手を見る際の着目点

選手を見る際の着目点においては、「選手」が最も多く、次いで「競技力」「技術」であった（図5）。そして「選手」と関連のあるキーワードについては、「競技力」「技術」の他に「表情」「試合」「スカウト活動」となっている（図6）ことから、競技力や技術といったプレー面だけでなく、選手の表情からも良い選手を見極めていることが推測される。

例として、指導者Bは、「実際に試合を見たときのパフォーマンス。瞬発力のある選手なのか。見てわかるじゃないですか、将来性って。この選手はどこまでいきそうかって。」と述べており、

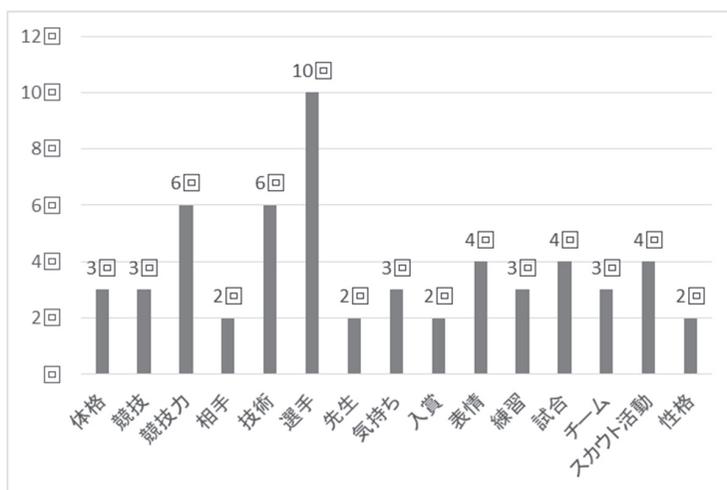


図5 選手を見る際の着目点に関するキーワード

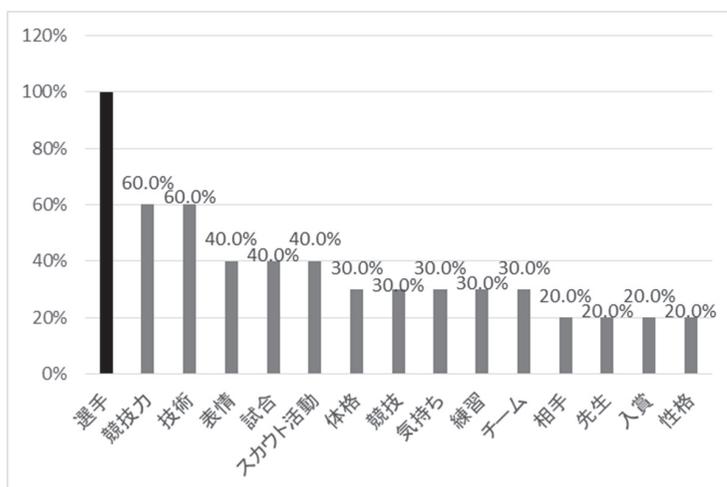


図6 着目点における「選手」と他のキーワードの関係

指導者Cは「技術としては、走れる、守れる、打てるの中でのセンスと伸びしろがある子。」と述べている。また表情について、指導者Iは、「顔。カッコいいとかじゃなく、輝いているような子。そういうところは見る。」とし、指導者Jは「私は見に行く時、双眼鏡を持っていく。結構スタンドと距離があるから。ピンチのときにどういう表情をしているか。ベンチばかり見て気にしている子、なにくそと向かっているのが表情に出ている子。」としている。そして、「気持ち」や「体格」というワードも抽出されているが、この点について指導者Fは、「技術はないけど、メンタルは強い子。その子に対して、他に手をあげる大学がなければ、その子を取る。」とし、種目によっては「とりあえずの体格。背が高いとか顔が肉づきがいいとか、そういうのをもちろん見る。割と気にしている。」として「体格」を見る場合もある。

### 3.1.4 スカウト活動時に話をする相手

スカウト活動の際に話をする相手は、「選手」と「先生」の抽出数が最も多く、次いで「親」が多かった（図7, 図8）。したがって、スカウト活動の際には、高校の教員や指導者と話をしていることが明らかになった。

この背景には、「本人と話す。最初、高校の先生に挨拶だけして、この競技は結構自由なので、『どうぞどうぞ』みたいな（感じになっている）。」（指導者E）という場合と、「先生の了解を得て本人に会う。中には決まっているからといって会えない子もいる。」（指導者F）、「まず高校、クラブチームの指導者と話をさせてもらう。可能性がある場合には本人と話をさせてもらう。」（指導者G）という場合、逆に「本人と話すのは違反。高校の先生に聞く。」（指導者G）、「暗黙のルールがあり、選手には聞けない。聞けるのは指導者。」（指導者I）という場合があり、種目によってルールがあることが推測される。しかしながら、最初から本人と話すことはなく、先生が間に入っていることがほとんどである。

また、親に関しては、「（先生と話しをして）それで話が上手くいけば、親御さんに会って話をする。親御さんでも、お父さんより、お母さん。お母さんと本人が話すことが多くて、お母さんに本音を話しているケースが多い。」（指導者F）、「（試合や練習が）終わった後、実際に顔を合わせて話をさせてもらう。本人、親御さん、先生を含めて。」（指導者B）と述べるように、親と話す場合でも先生が関連している。

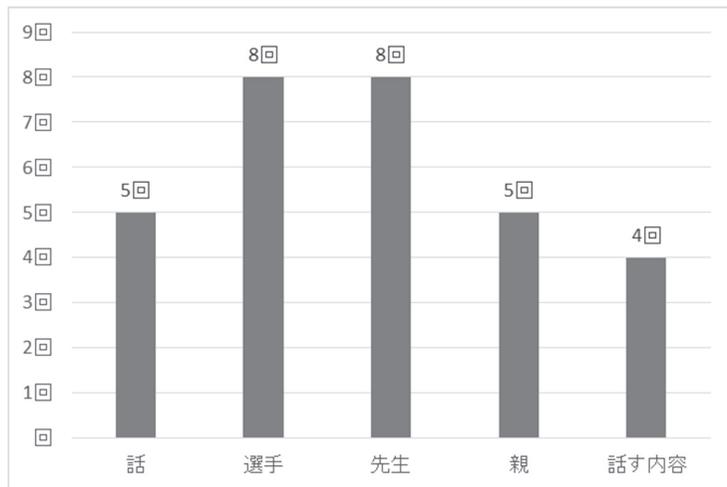


図7 話をする相手に関するキーワード

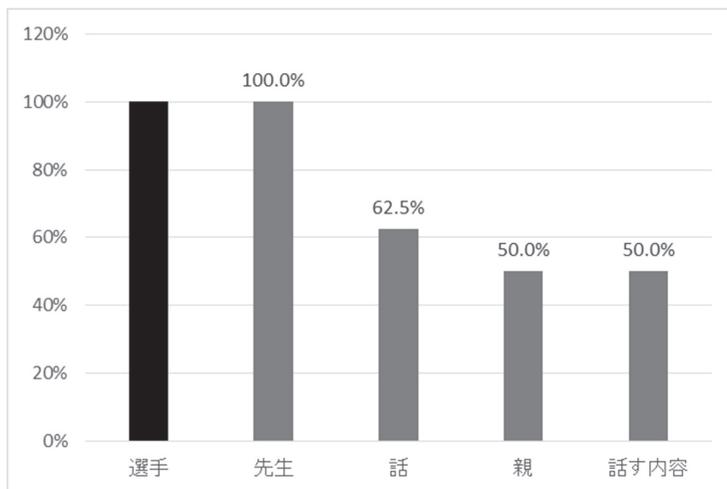


図8 話をする相手に関して「選手」と他のキーワードの関係

### 3.1.5 スカウト活動時に収集する情報

情報収集内容について多く抽出されたのは、「選手」「性格」が最も多く、続いて「親」「試合」「家庭」「先生」「将来」であった(図9参照)。そして「選手」と関係が深いワードは「性格」と「家庭」であった(図10)ことから、試合や練習を見に行っただけでは知ることができない内容を聞いているものと推測される。

この点について、指導者Cは「高校の先生には、その子がどういう子かということをおブラートに包んで聞く。性格、同級生と仲がよいか、学業ができるかなど。親にはあまり聞かない。チームにマイナスにならない子かどうか。高校の先生に好かれていない子。例えば、『この子はちょっと難ありだよ。一癖あるよ。』とか、いじめられっ子よりもいじめっ子みたいなニュアンスの発言がある場合は気を付ける。」と述べており、指導者Eは「競技は見れば分かるので、競技じゃない

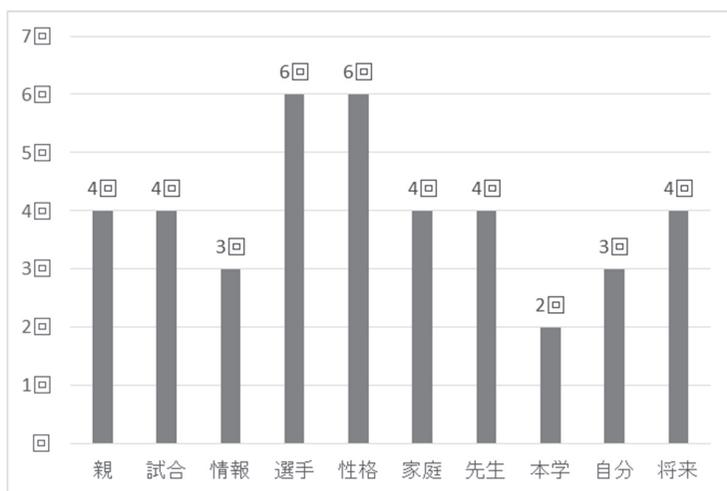


図9 情報収集内容に関するキーワード

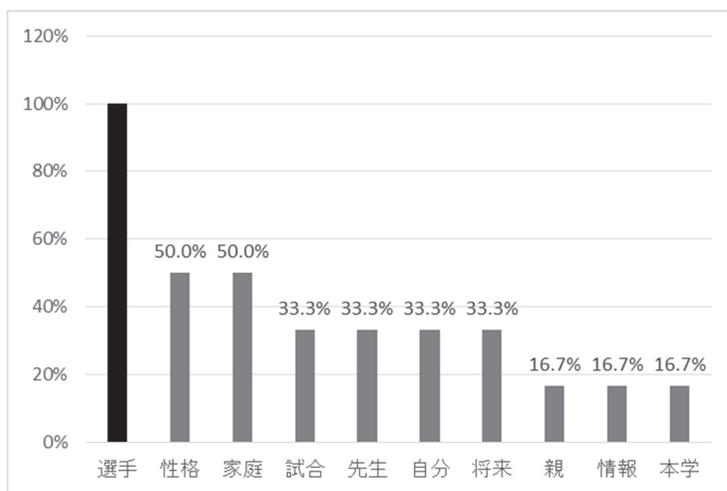


図10 情報収集内容における「選手」と他のキーワードの関係

ところ。例えば、試合態度とか地域での噂とか。性格。内面。」と述べている。また「母子家庭など家庭事情は気にする。学費が払えなくなるなど、お金の面は心配ないかという点に気を付けてあげなければいけないと思う。家庭事情と金銭面については、本人が言わない場合もあるので、高校の先生から聞くこともある。」(指導者C)、「性格や将来どうしたいか、家庭の事情などを聞いている。」(指導者D)とするように、本人や親には聞けない「家庭」の事情についても高校の先生から情報を得ている。

また「将来」についても聞いており、「将来自分はどのような選手になりたいのか、大学でやりたいのか、高校からプロに行きたいのか、社会人に行きたいのか、大学に来るのであれば、大学から将来プロになりたいのか、人生設計のようなことを聞く。」(指導者J)、「聞くことと言えば、競

技でどのレベルにいきたいのか、将来どういう道に進みたいのかという部分。」(指導者B)と述べている。

### 3.1.6 大学生選手のスカウトをする際の着目点

プロ選手ではなく、大学生としてプレー選手をスカウトする際に着目する点については、「性格」と「勉強」が上位で抽出されている(図11)。そして、「選手」と関係の深いワードは、図12のように「性格」となっていたことから、大学生としてでも、選手の性格を重要視していることが伺える。

勉強面について指導者Dは、「学びたいことがあるか。競技だけでなく将来の事など勉強したい目標を持っているか。」と述べており、指導者Gは「やはり大学なので、どのような勉強に興味

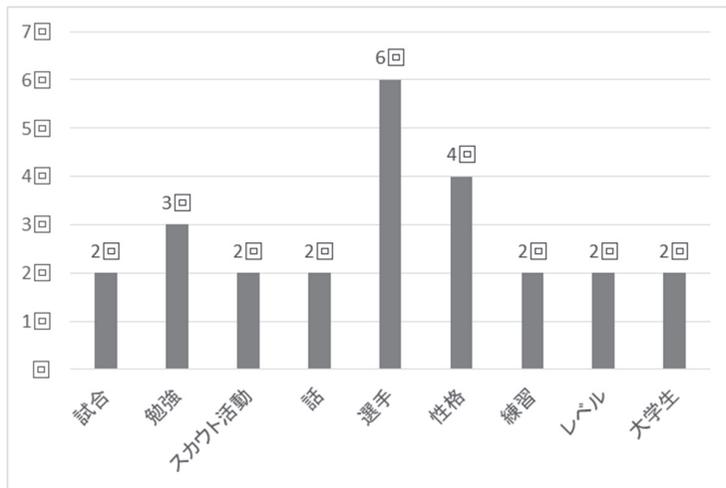


図 11 大学生選手のスカウトをする際の着目点に関するキーワード

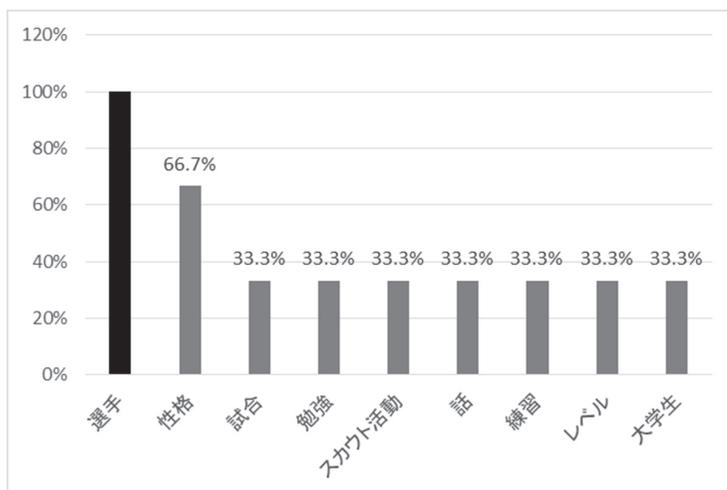


図 12 大学生選手のスカウトをする際の着目点における「選手」と他のキーワードの関係

を持っているか、そのやりたい勉強が本学にあるかということはしっかりお互い確認している。競技をやるためだけにスカウティングするのではない。入って『全く勉強に興味がない』というのでは困る。しっかりその辺りの説明もしている。』、指導者Iは「勉強はしないといけないので、ある程度の学力はないといけない。その辺は先生に『勉強ついてこれますかね?』というようなことは必ず聞くようにしている。」と述べている。以上のことから、大学生をスカウトする場合は、人間性だけでなく「勉強面」が重要になってくるといふ特徴があると考えられる。

### 3.1.7 スカウト活動時のキーパーソン

キーパーソンに関しては、「選手」と「親」、「先生」が最も多く抽出され（図13）、「選手」との関連についても、「先生」と「親」が強く関連しており、次いで「意思」となっていた（図14）。

先生との関連については、「学校によって違う。学校によっては、監督が『お前そこ（の大学や

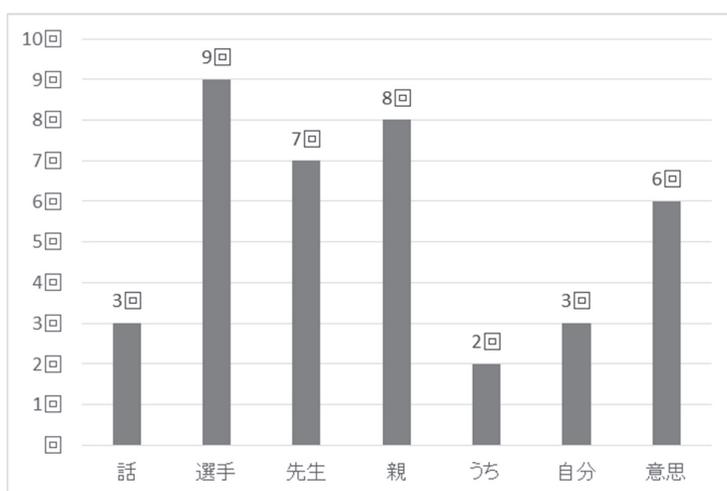


図13 キーパーソンに関するキーワード

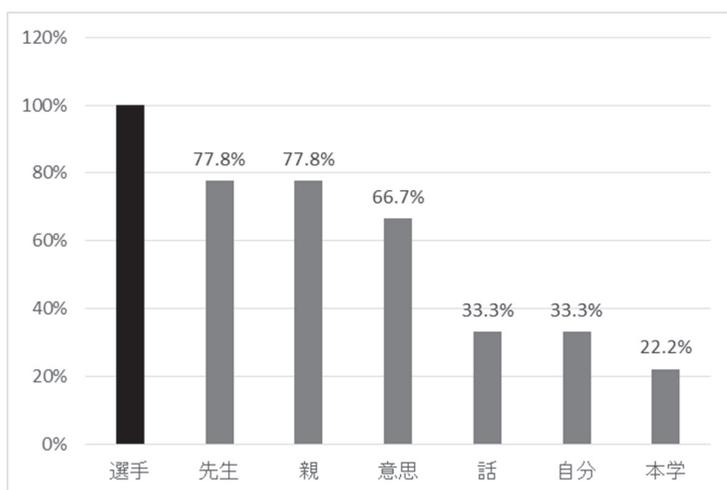


図14 キーパーソンに関する「選手」と他のキーワードの関係

企業)に行けよ。』という場合もある。個人に任せている監督もいる。当然本人の意思だが、高校によっては本人の意思に関係なく、監督の意思で決まる場合もある。」(指導者I)とし、「高校と大学ということで、高校の監督さんと大学の過去の繋がり、パイプがかなり強いものがあるので、そこを切り崩すというか、うちの大学も入れてもらうように(する)。高校の監督に『どこそこに行ってみたら?』と言われて練習に来る子が多いので、高校の先生も重要な部分を占めている。」(指導者G)としている。そして親との関連については、「やっぱり、親御さん。お金を出すのは親御さんなので、親御さんの理解を得ること(が重要)。本人は『うちに来たい』と言っていたが、某有名大学から話がきたら、親御さんはそっち(に行く)となってしまう、結局そちらの大学に行ってしまった。親が言いくるめたら、本人も『親が言っているんで(その大学に行きます)』となってしまう。本人の意思を尊重するという親御さんもたくさんいる。でも、未成年なので、家族の応援というか、理解は絶対必要。」(指導者B)、「親と高校の先生。本人よりも。本人も悩むので、親や先生のアドバイスに結構左右される。」(指導者E)と述べるように、本人の意思よりも、大人の意味が反映されることも多いようである。

### 3.1.8 志望校を決定する際のキーポイント

図15のように、入学を志望するかどうかを決める際のキーポイントについては、「選手」,「先生」,「親」が多く抽出されており、この点については彼らがキーポイントとなるからであると考えられる。続いて多かった「本学」に関しては、「環境」や「寮」とも関連しており、競技する上での大学の練習環境や生活環境によるものだと考えられ、「費用面」に関してもこれらにかかる費用である。そのため、「選手」と関連するワードについても、これらがそれぞれ抽出されていた(図16)。

例として、指導者Dは「親御さんを安心させられるか。大学からのしっかりとしたバックアップがあることや、競技だけでなく様々なことを学べる環境、寮なども近くにあり安心して大学に通わせられることをわかってもらう。」としており、指導者Aは「環境は大きい。設備のことではなく、例えば、『自分はこういうことしたいんです』というのがある子は、それを完全には無理かもしれないが、ある程度やらせてもらえるかという(こと)の(確認)があると感じる。後は、大

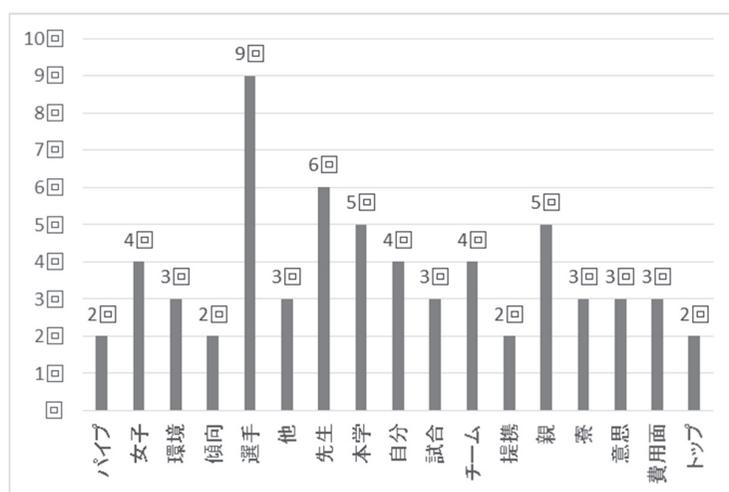


図15 志望校を決定する際のキーポイントに関するキーワード

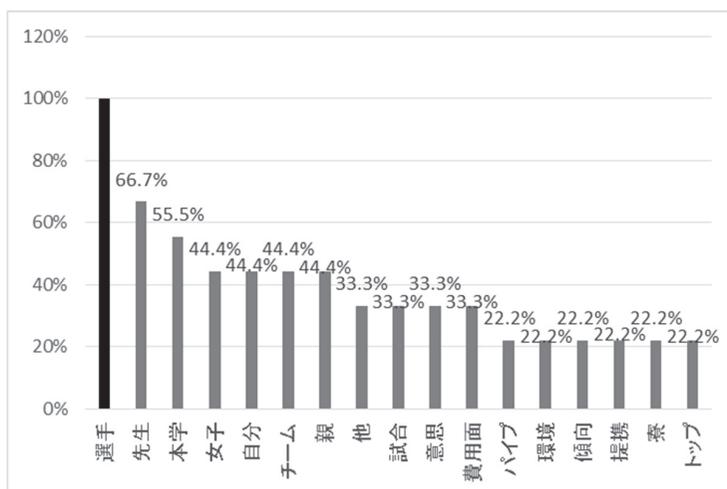


図 16 入学志望を決定する際のキーポイントに関する「選手」と他のキーワードの関係

学もお金がかかるので、生活をしていく上でアルバイトが必要だとか、そういう条件等も含めて、ここならやっていけると思わせる環境。」と述べている。また指導者Fが「今の時代、費用面。後は、指導者。どこの大学が将来性があるかというのを見ている。」「ここには色々なカテゴリーがある。」と選手に応じたレベルでプレーできることを協調する（指導者H）ように、環境とは設備などのハード面だけでなく、指導者やレベルに応じたチーム分けなどのソフト面も重要になってくると考えられる。

### 3.1.9 大学生としてプレーする選手のスカウト活動時の苦労点

プロ選手ではなく、大学生としてプレーする選手がスカウトの対象であることから、「選手」の他に「勉強」「プロ」というワードが多く抽出された（図17）。そして「選手」と関連性についても、「勉強」と「プロ」が上位となっていた（図18）。

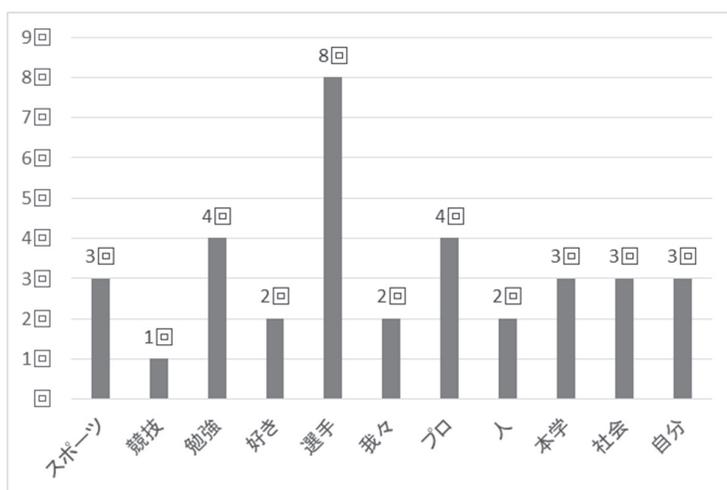


図 17 大学生選手のスカウト活動時の苦労点に関するキーワード

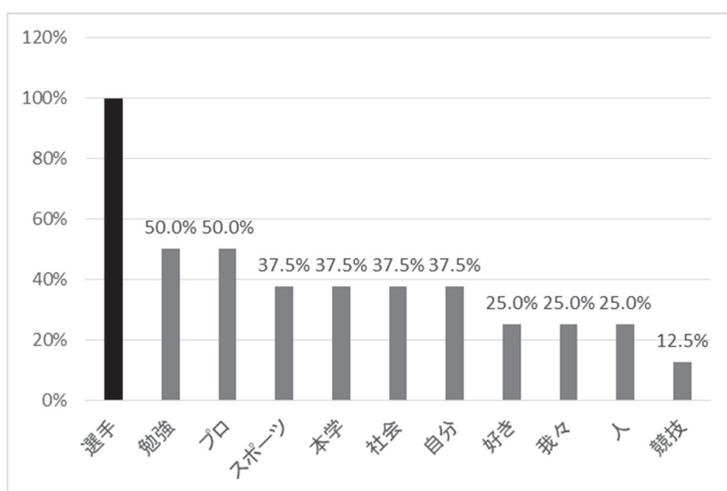


図 18 大学生選手のスカウト活動時の苦労点における「選手」と他のキーワードの関係

勉強面について指導者Hは、「学生というのは、あくまでも本業は学問であるということ。知識を植え付ける場所でもある。それは、社会に出ていった時に、自分が大きな人間になるために必要な要素。」と述べており勉強が嫌いな高校生はスカウトし難いといった状況があったり、勉強をしたくても「競技はやりたいけど、学びたい学部がなかったりということもある。」(指導者C)とされるように、競技をやっていれば良いわけではないので、競技環境が良くても勉強面での条件が合わない場合は、入学志望に繋がらないといった苦労点もあるようである。

また、「社会」というワードも上位で抽出されているが、この点については、「社会人にできるかは、本当に肝なので、結構、就活にも口を出す。無事に(社会人)になってくれることが一番。」(指導者A)、「基本は、社会に出るために何をするのか、競技を通して、何をすればいいのか」(指導者F)と述べるように、大学生の場合は卒業後は就職させなくてなはいけないといった点も苦労点とされている。

### 3.1.10 大学生を指導する際の苦労点

図19のように、入学後、大学生を指導する際の苦労点について、「選手」に続いて、「先」「勉強」「先生」「自分」というワードが多く抽出され、「選手」との関連性についてもこれらのワードが上位であった(図20)ことから、勉強面が問題になっていることが推測された。

勉強面について指導者Cは「勉強と競技の両立で(手)いっぱいになっているところを見ると、もっと心に余裕を持たせてあげられたらいいと思う。高校の成績が良かったのに、大学の勉強についていけない子がいた時にあれ(どうしたのだろう)と思う。」とし、指導者Dは「部活には休まず来ているが、授業となると休む子が出てくる。そういったところまでしっかり管理しないといけない。」と述べている。この点について指導者Iは「困るのが、中学から高校に入るときにあまり勉強していないはず、競技で高校に行っている子が多い。高校の時も一生懸命競技をやっている、競技で大学に行っている子が多いはず。それをいきなり、大学の高等教育というのかな、(大学の講義を)受けさせても、それはなかなか理解できないかなと(思う)。勉強をする癖がついていないから、要領が分かっていない。」としており、このように、高校までスポーツを中心として勉強をあまりしてこなかったことが、勉強とスポーツを両立できない理由になっている可能性が

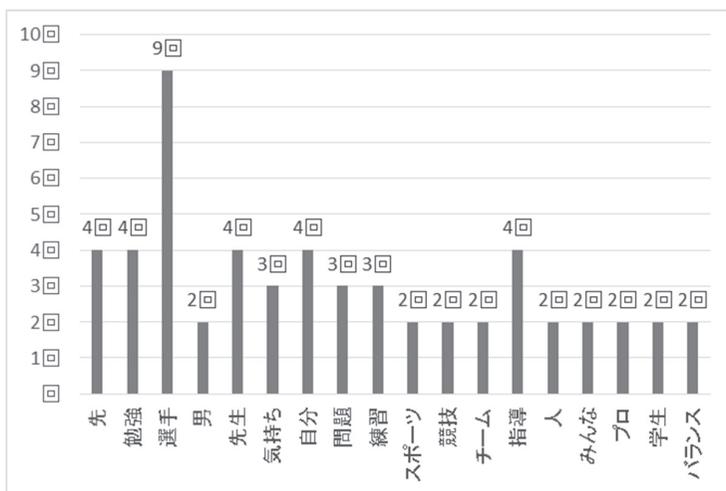


図19 大学生を指導する際の苦労点に関するキーワード

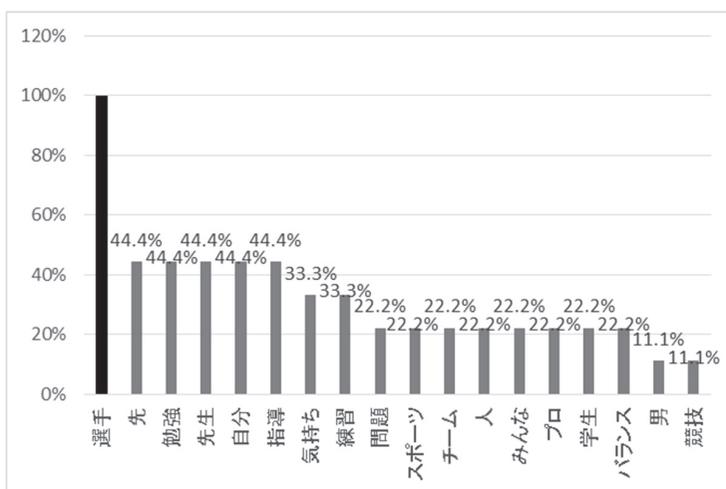


図20 大学生を指導する際の苦労点に関する「選手」と他のキーワードの関係

推測される。

### 3.1.11 大学でプレーすることが向いている選手の特徴

大学でプレーすることが向いている選手に関して、最も多く抽出されたワードは「選手」であったが、次いで「勉強」であり、その後は「人」「本学」「社会」「自分」「練習」であった(図21)。そして「選手」との関連については、「勉強」が最も関連しており、次いで「プロ」「自分」「練習」が関連していた(図22)。

このように「勉強」と「練習」が関連していた理由には、勉強と競技の両立が挙げられる。指導者は「学生の本業は学問を学ぶこと。サッカー、野球だけをやる所ではない。これが学校スポーツ。この大学にもプロになりたいという子もかなり来ているが、そんな性格じゃダメでしょ(と思う)、遅刻もする、授業中寝ている、プロの人にはそういうのはないよ(言う)、もっと

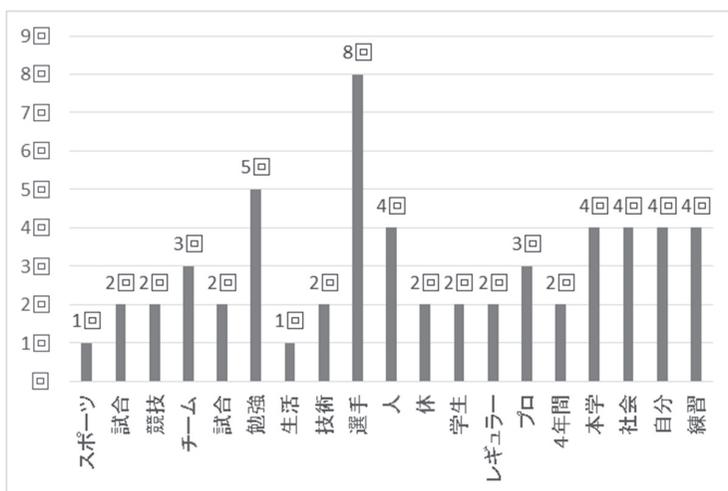


図 21 大学でプレーすることが向いている選手に関するキーワード

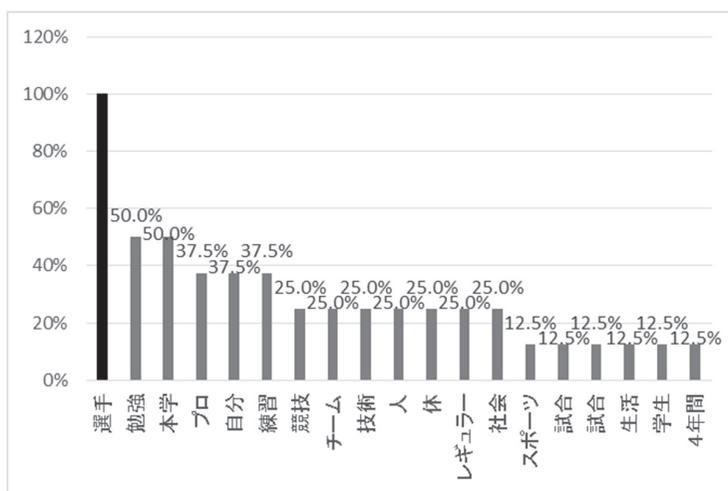


図 22 大学でプレーすることが向いている選手に関する「選手」と他のキーワードの関係

厳しいよって（言う）。だからそこを履き違えている人がいる。」と述べており、指導者Gは「本当に競技だけをやる集団ではなく、大学の部活動なので、やはりチームワーク，絆が非常に大事になってくる。勉強も部活も真面目に取り組むことができる子が理想。」としている。

また「プロ」というワードに関しては、プロと大学生の違いが多く挙がっていた。指導者Hは「学生と競技を職業としている人とは違うのは当たり前。」とし、指導者Cは「実業団に行く子は、技術があれば性格に難があっても、引き抜かれる。そこから企業に揉まれて染まっていく。この子はいいなと思う子は、ほとんど実業団に行く。先生になりたいとか、勉強を頑張りたいという子に関しては大学を選ぶことはあるが。競技以外でやりたいことがあるかで、プロに行くか大学に行くかが決まる。」と具体的に述べていた。

### 3.2 結果のまとめ

以上のことから、以下の点が明らかになった。

- スカウト活動の方法は、試合や練習を直接観に行く方法である。
- 選手の情報は高校の教員から取得する。
- 競技力や技術といったプレー面だけでなく、選手の表情からも良い選手を見極める。
- スカウト活動時に話をする主な相手は高校の教員であり、最初から生徒本人と話をすることはできない。
- 試合や練習を見に行っただけでは知ることができない、生徒の性格や家庭状況について高校の教員から情報を収集する。
- 大学生のスカウト活動では、プレー面や人間性だけでなく、勉強面が重要なポイントとなる。
- スカウト活動時には、生徒の親と高校の教員が重要な他者となる。
- 志望校の決定には、練習環境や生活環境とともに、費用面がキーポイントとなる。
- 設備などのハード面だけでなく、指導者やレベルに応じたチーム分けなどのソフト面も重要である。
- 競技面での条件が合っても、勉強面での条件が合わない場合は、入学志望に繋がらない。
- 卒業後の進路について安心できるかどうかが重要である。
- 入学後は、勉強とスポーツとの両立が問題となる。
- 社会人としてプレーすることと、大学生としてプレーすることが向いている生徒は異なる。
- 勉強をすることができない生徒は、大学でプレーすることには向かない。

## 4. まとめにかえて

本研究の目的は、有望な大学生アスリートを判断するための一助とすべく、近年スポーツに力を入れている大学を事例として、高校生アスリートを大学スポーツ界にスカウトする際のポイントを明らかにすることであった。

したがって、高校生アスリートを大学スポーツ界にスカウトする際のポイントは、以下の点にあると考える。

- ①高校の教員との良好な関係の構築
- ②親を安心させる策の構築
- ③スポーツと勉強の両立が可能な生徒の選抜
- ④ハード面（練習施設・寮など）の整備
- ⑤ソフト面（指導者・チーム編成・奨学金など）の整備

## 5. 研究の限界

本研究は事例研究の域を出ていないことから、今後は、多数の大学に調査の幅を広げて行うべきだと考える。

### 参考文献

- 1) 阿部篤志 (2006) 非競技特化型タレント発掘・育成プログラムの評価モデルの開発——プロセス評価のアプローチ——. 上月財団.

- 2) 藤澤義彦・田淵和彦 (2005) スポーツ選手の資質の検討における骨密度測定の可能性. 同志社保健体育, 44, 29-44.
- 3) 勝田 隆著・河野一郎監修, (2002) 知的コーチングのすすめ. 大修館書店.
- 4) 勝田 隆・栗木一博・小西裕之・和久貴洋・蒲生晴明 (2005) タレント発掘プログラムの必要性と可能性 種目転向プログラムの構築に関する基礎調査. 仙台大学紀要, 36 (2), 50-58.
- 5) 松井陽子 (2012) 地域タレント発掘・育成事業における測定・評価. 日本体育学会大会予稿集, (63), 53.
- 6) 松永敬子 (2015) スポーツタレント発掘事業における非選抜者へのサポートプログラムに関する一考察: スポーツマーケティングの視点から. 龍谷大学経営学論集, 55 (1), 65-72.
- 7) Mayring, P (2000) Qualitative Content Analysis. Qualitative Social Research, Vol 1, No. 2.
- 8) 内藤久士 (2008) 最近の子どもの体力・運動能力の現状と課題. 体力科学, 57 (3), 410.
- 9) 日本オリンピック委員会 (2008) 地域タレント発掘・育成事業に対する協力ガイドライン.
- 10) 抜井ゆかり (2012) テキストマイニングを用いたトラベルライティング分析による観光シソーラスの構築. 観光科学研究 (5), 177-184.
- 11) 清水孝彦・櫻本浩司・内藤久士・白澤卓二 (2008) 酸素運搬能に関わる遺伝子多型. 体力科学, 57 (1), 50.
- 12) 竹野欽昭・伊集旭寿・岡野和輝・金城一樹 (2015) 大学スポーツ選手における過去を想起した心理的競技能力評価と妥当性の検討. 上越教育大学研究紀要, 34, 275-282.
- 13) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲富 勉・斎藤 孝 (2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. 健康科学, 22; 109-120.
- 14) 堤 葉子・岩原文彦・岩本陽子・襦屋光男・浅見俊雄・久木留毅 (2002) タレント発掘に関する基礎的研究. 日本体育学会大会号, (53), 514.
- 15) 八重樫瞳・勝田 隆 (2010) 国際競技力向上を目的としたスポーツタレント発掘育成事業の背景と課題: JOC・JISSと連携する地域の取り組みから見えてくるもの. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 11, 189-197.
- 16) 柳原 大 (2008) モータースキル遺伝子の発掘のための基礎的研究と今後の展開. 体力科学, 57 (1), 51.
- 17) Williams, A. M., & Reilly, T. (2000) Talent identification and development in soccer. J Sports Sci, 18 (9), 657-667.